

ドナウ の 四季

2016年・新春号・No.29

多文化共生社会の現実	森田 友子	1
テロと付随的損害(Collateral Damage)	盛田 常夫	2
「難民・移民」の大移動を後押しするソロス	盛田 常夫	4
留学生自己紹介	新野見 卓也	6
	中川 美紀	7
	藤本 茜	8
	青木 暖	9
日本語を勉強して分かったこと	ヘゲドウシュ・アーコシュ	10
終わりのない日本語、日本文化への愛	ホルノシュ・ダーニエル	11
漢字勉強の魅力と面白さ	シュテイーゲル・アーコシュ	12
ブダペスト日本人学校	吉田 健一	14
みどりの丘日本語補習校	今村 素美子	15
コンサート案内		16

多文化共生社会の現実

森田 友子

社会の片隅で育っている最中だった。彼らについての話もよく耳にしたが、ブルッセルの近くにはムスリムのスラム街があるから気を付けてとか、知り合った女性教師からは、ムスリムの男子生徒は女性の先生を受け入れないから困っているとか、大抵が批判的な意見ばかりだった。娘を連れて公園に行き、あからさまにこどもたちを交わせないようにするベルギー人家族を何度か目の当たりにした時は、まったくの偏見ではあるけれど、植民地のあった支配国の国民らしいなあ、と少し憤りを感じた。

しかもちょうどその頃に、隣国フランスで、公立学校で生徒の宗教的な標章の着用を禁止する、俗に「スカーフ法」と言われる法律が公布された。ベルギーでも頻りに話題に挙がり、しかもそれが正当だという風潮があったように感じられたので、私には正直ショックだった。単なる同情もあったが、ハンガリーにも少数民族のロマの問題があるけれど、ここまで露骨な排他的空気を感じたことはなかったから。

そして、フランスの同時テロが発生して容疑者の数人がベルギー出身だと聞いた時、大変に納得できてしまう自分が居ても複雑だった。12年前のあの時、こども時代を送っていた若者が、今組織に加わっていたということだ。ベルギーは「テロリストの温床」とまで言われている。なぜ、ここまで放ってきてしまったのだろう。

確固とした社会的地位があり上層に位置するユダヤ人と、下層を占めるコミュニティと化してしまったムスリムの人々が共存するベルギー社会。どうしたら健全に共生できるのだろう。今、ほぼ単一民族の日本でも貧困層の問題が浮上している。あちこちで社会の階層化について耳にする。万人が幸せに暮らせるよう、層を崩す努力をするのか、我こそはと上層にしがみつくなのか、人間のいざとなって取る行動はどちらだろう。多文化共生社会の理想と現実について、手遅れになる前にもっと考える必要があると思う。

(もりた・ともこ ヴェスプリーム在住)

人以外の人たちが多くなった。言葉もいろいろ、特にロシア語系が増え、子供たちの学校にも難民や移民の子が増えて、スイス語やドイツ語を話せる子が一人もいないクラスまで生じる始末で、スイス人の親たちは私立学校に子供を行かせたりして凌いできているけれど、今後どうなるか。そしてこれが全部私たちの税金で行われるのです。スイスという金持ちの国、金を出せという圧力がEUの方からもかかるけれど、やはり限りのあることと思う。でもEUはアメリカと同じように、思い通りにならないと制裁、という手段を使ってきます。野蛮極まりないです。

さて、私にはもう一つ、久々に頭をよぎることがあった。それはベルギー・アントワープ滞り時代に逢ったモロッコ系移民の人々のこと。当時親しくなったベルギー人夫婦が毎年キャンピングカーで遊びに来て、微塵も思い出すことなどなかったのに。

ベルギーで暮らしたのは、今から12年前。ハンガリーに数年住んでから移った地だったので、生活を始めてまず目に留まったのは、いわゆる白人には既に目が慣れていて、「カールしたのみあげ・真っ黒な装束に身を包んだ正統派ユダヤ人」と、「頭のとっぺんからスカーフを被ったムスリムの人々」の姿だった。

アントワープは世界最大のダイヤモンドの町。ご存じ、ダイヤモンドとユダヤ人は切っても切れない関係で、アントワープ中央駅の東側一帯にはユダヤ人のコミュニティが広がっている。この地帯に足を踏み入ると、アントワープが「西のエルサレム」と言われる所以がすぐに納得できる。ベルギー生活が慣れた頃には、ダイヤモンド鑑定士やカット職人などという人たちが身近になり、そのボスたち＝ユダヤ人についての噂話を聞かされるのが度々あった。

一方、ムスリムの人々は、大半が1960年代に労働力不足を補うために呼び寄せられた外国人労働者で、そのままベルギーに残ったモロッコ系、トルコ系の移民。この頃には、既に二世、三世が誕生し、ベルギー

2015年夏の終わり、押し寄せる難民の問題は、自分の生活にもくっきりと足跡を残していった。日々めまぐるしく変化する情勢は、毎日のニュースについていくだけで精一杯、状況把握できずに不安だけが募っていった。加えて日本や周辺国であまりに断片的で浅はかな見解で叩かれるハンガリー関連ニュースには心を痛めた。そんな中、編集長盛田さんから送られてくる時事解説は、カオスと化していた頭が一息つける恵みのメールだった。

このメールは日本の家族にはもちろんのこと、これまで子供の成長や一時帰国の予定についてくらいしかやり取りのなかった知人友人にも転送した。おかげでそれ以降は日本の政治や国際情勢もテーマに挙がるようになった。すっかりご無沙汰して新年の挨拶に落ちてしまっていたイギリス、ドイツ、スイスに住む友人とも交流が再開し、各国の状況を情報交換するようになった。

スイスに、過去に様々な難民を受け入れたことのある村に30年以上暮らす音楽家の知人がいる。難民の現実の感覚をもつ彼女からは、「人権、人権というけれど、その国にもともと住んでいる人たちにも人権があり、人道にも限界がある。人間は、万人が安定した静かな人生が送れる環境を、戦って勝ち取らなければならない」というところが難しいですね。同じことを繰り返して破壊を繰り返す、人間の本能と本質にあるものなのでしょう、どうすることもできないのでしょうかしらね」。そして、「どんなにアンテナを張っていても、その渦中にいる人と、ちょっと離れたところにいる人では、見えること、知り得ることにもものすごく差が出ます。私はもっと現状を知りたいです。是非またそちらでわかることをいろいろ教えてください。」と返信があった。

また、次のメッセージを受けてからは、難民問題が自分の身にもぐっと近づいたように感じた。「スイスという九州くらいしか面積がなく、そのほとんどが高い山で人が住めないところに、近年はアフリカからの人も増え、道や電車で見かける人々はスイス

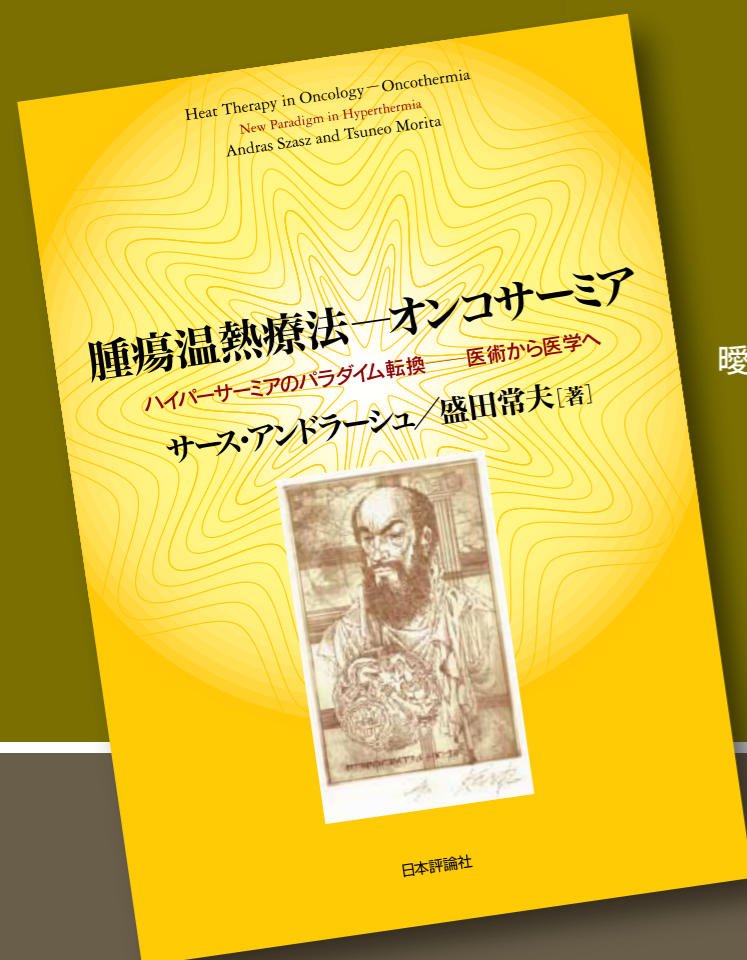
温熱治療のパラダイムを転換する

温熱治療を根本から見直し、
あるべき手法を示した著書。
曖昧な日常知を科学によって解明した画期的な著作。

オンコサーミア治療器は世界25カ国で利用。
ドイツでは百か所以上のクリニックで、
韓国の主要な大学病院に設置。

好評発売中。定価3200円+税。
大手書店、Amazonにて購入可。

- 第1章 ハイパーサーミアの歴史と評価
 - 1.1 ハイパーサーミアとは何か
 - 1.2 ハイパーサーミアの曖昧さと課題
 - 1.3 ハイパーサーミアの歴史的概観
 - 1.4 腫瘍治療のハイパーサーミア
- 第2章 ハイパーサーミアの物理学
 - 2.1 電磁気学の基礎概念
 - (1) 電磁気現象
 - (2) 電場と磁場
 - (3) キャパシタ
 - (4) 位相シフト
 - (5) インピーダンス
 - (6) 電磁波
 - 2.2 バイオ電磁気学
 - (1) 電磁波スペクトル
 - (2) バイオインピーダンス
 - 2.3 「非熱」効果
 - (1) 非温度依存 (NTD) 効果
 - (2) 電磁場におけるNTD効果
 - (3) 電磁気による目標選択
 - (4) 電磁気と生体システム
- 第3章 ハイパーサーミアの生理学
 - 3.1 生体におけるエネルギー、熱、温度
 - 3.2 生体における温度制御
 - 3.3 生体の加熱と体温
 - 3.4 加熱による温度の分布
 - 3.5 全身加熱と局所加熱の本質的な差異
 - 3.6 加熱と冷却：リスクとその回避
 - 3.7 温度測定と熱積算量 (ドーズ)



- 第4章 腫瘍温熱療法
 - 4.1 腫瘍温熱治療の基本概念
 - 4.2 ハイパーサーミアの手法
 - 4.3 熱の作用と併用効果
 - (1) 熱と血流
 - (2) ハイパーサーミアの併用効果
 - 4.4 ハイパーサーミアの熱生成
 - (1) アンテナ放射
 - (2) 磁場 (コイル)
 - (3) 容量性カップリング
 - (4) 伝導加熱
 - 4.5 ハイパーサーミア治療が抱える問題
- 第5章 オンコサーミアの理論と方法
 - 5.1 電場の利用
 - 5.2 細胞燃焼
 - 5.3 腫瘍治療における細胞加熱
 - 5.4 ミクロスコピック加熱
 - 5.5 集束化の原理
 - 5.6 温度の役割
 - 5.7 安全性
 - 5.8 積算量 (ドーズ)
 - 5.9 臨床事例
- 第6章 自然療法としてのオンコサーミア
 - 6.1 ホメオスタシスの復位
 - 6.2 細胞の自然死の促進
 - 6.3 細胞転移の阻止
 - 6.4 転移がん細胞に作用

テロと付随的損害(Collateral Damage)

盛田 常夫

ロンドンとイスタンブール

11月13日のパリ・テロ事件から4日目の17日夜、ロンドンのウェンブリー・スタジアムで英国とフランスのサッカー親善試合が挙行された。荘厳なセレモニィの後、英国国歌とフランス国歌が流され、選手と観客はともに黙祷を捧げた。サッカー・ゲームの開始前とは思えないほどの厳肅さがスタジアムを支配していた。

同じ夜、イスタンブールではトルコとギリシアの親善試合が行われた。ここでは試合開始直前に両チームの選手がグラウンド中央のサークルで肩を組み、1分間の黙祷を行った。しかし、イスタンブールのスタジアムは終始、騒然としており、黙祷の間も静寂が訪れることはなく、多くの人が口笛や怒号で黙祷を拒んでいた。

この二つのスタジアムの違いは、ヨーロッパ社会とイスラム社会でテロの受け止め方がまったく異なることを教えてくれる。中東のイスラム社会の甚大な人的犠牲を無視して、ヨーロッパ社会が受けたテロ被害だけを追悼することを、トルコの人々は拒否しているのだ。人は自らの痛みは分っても、他人の痛みは分からない。ほとんどの人々は中東社会で何が起きているのかも知らないし関心がない。他人の痛みに思いを馳せることなく、自分の痛みだけを大げさに強調する大国の姿勢を拒否していると考えれば、イスタンブールの観客の反応が理解できる。

アメリカを中心とする有志連合に加わる西側諸国の政治家は、イラクやシリア空爆による民間被害を付随的損害(collateral damage)と呼んでいる。付随的死(collateral death)とも呼ばれるが、Wikileaksはこれを付随的殺人(collateral murder)と名付けている。攻撃する側にとって目的遂行に付随する「止む得ない犠牲」でも、攻撃を受けた住民は付随的損害で処理されてはたまらない。付随的死も殺人に変わりはない。

西側で起こされるテロは許されない殺人で、戦闘に伴う住民の犠牲は許容範囲にある「付随的な死」などと考えることができ

ようか。政治家や軍人が唱えるならまだしも、一般国民が為政者の論理に填まってしまつては、永遠に他者に思いを馳せることはできない。

直接の原因は空爆

イラクやシリア難民はアメリカのイラク侵攻やシリア内戦への負担によって発生したものだ。これまでほとんどの難民は近隣諸国に逃れており、ヨーロッパを目指す難民の数はそれほど問題になることもなかった。ところが、今年に入って、トルコに逃れた難民の一部が大挙してヨーロッパを目指すようになった。難民の密航を組織し、支援する団体の活動が活発化したことも一つの要因だが、最大の原因は2014年8月に始まったアメリカによるイラク空爆である。

アメリカのイラク空爆は翌9月にシリアへ拡大され、2015年10月末までに実に8125回も出撃した。空爆の激化とともに、比較的裕福な難民がヨーロッパを目指す動きになった。

われわれはアメリカの空爆によって、どれほどの民間被害が出ているのか知らないが、いつ何時(なんどき)家もろとも吹っ飛ばされるか分からない危険があれば、逃げるより方法がない。実際、アサド政権を擁護するロシアが空爆を始めて、民間犠牲者が多く出ていることが報告されているが、アメリカの空爆ついては時折、誤爆が報道されるだけで、実際の民間被害の詳しい情報が公開されていない。アメリカの空爆だけが住民にとって安全なものであるはずがない。

空爆による民間の被害はcollateral damage、民間人の死亡はcollateral deathというのは軍から見た話で、住民からみればcollateral murder(付随的殺人)だ。何千何万という人がcollateral murderの犠牲になっているが、西側世界からは「不可避の損害」で片付けられる。明らかに、西側が考える人命の価値には、西と東では雲泥の差がある。そういう価値観にもとづき、パリの犠牲者だけを悼むセレモニィには加われないというのが、イスラム社会の想いだろう。

Collateral Murder

Wikileaksが暴露したイラクにおける民間人殺害のビデオが、Youtubeにアップロードされている。Collateral Murderと命名されたこのビデオは、2007年7月12日に新バグダットの居住地区で、アメリカ軍のヘリコプター・アパッチ2機から目標を銃撃したアメリカ軍の記録である。short version(18分弱)とfull version(40分弱)が公開されている。

この事件で何名の犠牲者が出たかは不明だが、Reuter社の現地雇用者2名とその救助者も犠牲になり、Reuter社がアメリカ軍に検証を要求していたものだ。アメリカ軍は、「軍法と職務規程に則った行動である」と結論づけたが、Wikileaksは内部告発者からこの記録ビデオを入手し公開した。

比較的地上に近い位置からの銃撃ですら誤爆や民間人の殺害が起きるのだから、高い空中から行われる爆撃で標的が絞れるわけがない。空爆は事実上、無差別爆撃になってしまう。そういう、無差別爆撃を続ければ、犠牲者の恨みを買うのは当然ではないか。「付随的損害」、「付随的死」などと無人格化されて済む話ではない。

アメリカは原爆投下以後、戦後の紛争介入において、一貫してcollateral murderを繰り返してきた。ヴェトナム戦争では、実に百万人を超えるヴェトナム人が犠牲になった。この時も、アメリカは戦死した5万人の兵士に荘厳な埋葬式を執り行ったが、ヴェトナム人は家畜同然だから殺戮しても謝罪の言葉など一切ない。アメリカにとって、戦死した兵士は国家の英雄で、アメリカに抵抗するヴェトナム人はヴェトコン(共産主義者)だから殺戮対象か付随的死に値する人種だったのである。原爆投下の論理も同じである。戦争を終わらせるためというより、原爆の効果を確認める実験であり、侵略者のイエロージャップなら民間人でも殺戮して構わないという理屈である。

ヴェトナム戦争で苦汁を舐めたはずのアメリカは、再びイラク侵攻で中東世界を破壊することになった。この侵攻で犠牲になったイラク人は20万人を超えているはず

だ。シリア空爆でどれほどの犠牲者が出ているのか見当もつかないが、ヴェトナム戦争と同様に、アメリカ軍にとって「付随的損害」として片付けられる程度のもなのだ。

アメリカは絶対正義か

アメリカの軍事行動はすべて「正義」にもとづく行動であり、「正義」に立ち向かう者は「殺戮」に値する。圧倒的な軍事力を誇るアメリカへの批判はタブーであり、アメリカの行動を批判し、責任を追及する政治家はきわめて少ない。

今時の大量の難民移動の原因が、アメリカのイラク侵攻とそれに続く混乱にあることは紛れもない事実だが、左翼・右翼に関係なく、権力の座にあるヨーロッパの政治家はアメリカを公然と批判することはない。とくに、フランスやイギリスの左派と見なされている政治家は、アメリカを批判しないどころか、アメリカの軍事行動を支援するか、軍事的共同歩調をとっている。要するに、ヨーロッパの政治家はアメリカの帝国主義的政策に抵抗するどころか、その共同推進者の役割を果たしている。難民引受けを拒否する右派のオルバン首相(ハンガリー)にしても、左派のフィツォ首相(スロヴァキア)にしても、後ろ向きに拒否の姿勢を明確にしているだけで、大量の難民を発生させたアメリカの責任については一言も発言していない。

他方、アメリカとは言えば、自らが惹き起こした災禍にたいする責任感は何も無い。完全にゼロである。今時の大量難民発生が、イラク侵攻や空爆にあるなどとは考えもしない。まさに、他人の痛みに思いを馳せることができない、帝国主義的健忘症である。アメリカは常に絶対正義であり、タリバーン、アルカイダ、ISなどは「絶対悪」である。独裁政権を倒すことに正義があり、そのことが社会と国家に大きな混乱と災禍をもたらしたとしても、それは正義の達成ために不可避の犠牲であり、アメリカが謝罪する必要などまったくないのである。その証左に、オバマ大統領はヨーロッパの窮状を見かねて、シリア難民の1万人引受けを表明したが、まるで他人事だ。最初から引き受ける人数の桁が1桁も2桁も間違っ

ている。さすがに1万人ではまずいと思ったのか、1週間ほどして10万人に引き上げたが、アメリカの戦争責任を考えればまだ1桁少ない。アメリカの政治家がこれなら、アメリカ国民などは自らの政府が起こす他国・他民族の災禍などにはまったく無関心だ。

ジョージ・ソロスは欧州が年間100万人の難民を数年にわたって引き受けるべきだと主張しているが、それはまずオバマ大統領とアメリカ国民に向かって主張することではないか。なにゆえに、アメリカが始めた戦争の尻ぬぐいを、ヨーロッパの諸国が行わなければならないのか。

ロシア、イギリス、フランスが空爆に参加する理由

ロシアがアサド政権を擁護し、シリアにおける利権を確保したいという思惑は明々白白だ。もともとこの地域はイギリスの植民支配の地域だったから、イギリスにとっても無関心でいられる状況ではない。政治家の面子、軍需産業の保護、石油資源へのアクセスを考えれば、何らかの形で、当事者となっておくことは必要なことだ。だから、キャメロン首相は以前から、空爆参加に積極的だった。

それに歯止めを止めていたのは労働党である。イギリスではイラク侵攻への反省からシリア空爆は多数の賛同を得られなかった。ところが、パリのテロ事件で風向きが変わった。労働党から造反が出て、空爆参加が国会で承認された。ISをファシストに見立てた労働党の重鎮ヒラリー・ベンの演説が労働党の大量造反を生み出したと言われているが、左派といえども、この程度のレベルだ。日本の民主党のようなものと考えれば、何の不思議もないが。

政治家の本音と建前は別だ。理由や理屈は何でも良い。イギリス産業界にとって、シリアの石油資源は無視できない。ロシアとアメリカの和平協議が始まってしまえば、蚊帳の外に置かれてしまう。和平協議への動きが始まる前に、とにかく仲間の輪に加わっておくことが重要なのだ。

同じことはフランスにも言える。しかも、オランダ大統領にはこの事件を利用して、自らの政治力を誇示し、有能な政治家であ

ることを示して、党の劣勢を建て直すことが必要だ。だから、形振り構わず、ロシアであれ、アメリカであれ、一緒に手を組んでISを叩けば損しないという判断が働いている。そこには右も左も関係ない。政治家にとって、国民の災禍こそ、自らの得点を上げる絶好機なのだ。

黙りを決め込む安倍政権

これらの諸国に比べ、理解出来ないのはドイツの対応だ。いかにメルケル首相がオランダ大統領から直々頼まれたからといって、ドイツがシリアの空爆を支援しなければならぬ理由はない。キリスト教人道主義とシリア空爆は矛盾しないのか。百万人の難民を引き受けるだけで十分ではないのか。イギリスやフランスと違い、ドイツはこの地域に植民地支配の歴史をもっているわけではない。にもかかわらず、旧宗主国と共同歩調をとるのは、難民政策での協力関係を維持したいからなのか。それともここでもナチスドイツの過去の負い目が作用しているのだろうか。直近のCDUの党大会でも、空爆支援に批判がでていないのはどうしてだろうか。これがキリスト教人道主義の政治的限界なのか。

ところで、日本はどうか。有志連合に形だけ名前を連ねている日本にとって、空爆への協力支援は集団的自衛権行使の最初の試金石になるはずだが、安倍首相は黙り(だんまり)を決め込んでいる。下手に空爆支援など言おうものなら、世論の反発を受け、参議院選挙に大きく影響するからだ。側近やブレーンが、その助言を行ってることだろう。架空の非現実的な事例で集団的自衛権行使を説明するより、現実起こっている事態への対処方針から、集団的自衛権の必要性と行使要件を明快に説明すべきだ。本当に集団的自衛権が日本にとって必要不可欠だと考えるなら、ドイツのように空爆支援を行うべきではないか。選挙で負けることなど気にすべきではないはずだ。信念があるなら、大義の実現に政治生命を賭けるのが政治家というものだ。

(もりた・つねお
「ドナウの四季」編集長)

「難民・移民」の大移動を後押しするソロス

盛田 常夫

欧州への「難民・移民」の大量流入が止む気配はない。10月だけでも、20万人を超える人々が、セルビアからクロアチア、スロヴェニア、ハンガリーを經由してドイツへ向かった。毎日何千人もの人々が押し寄せれば、通過させるだけでもたいへんな仕事である。人々が移動した後は、大量のゴミが散らばっている。毎日掃除しても、次から次へと人々が押し寄せるから、清掃作業も並大抵ではない。

ドイツの受け入れ口となっているバイエルン州は連邦政府の政策転換を求めて、ゼーホファー州首相がメルケル連邦首相と厳しい交渉を進めているが、今となっては「難民・移民」の奔流を押しとどめる有効な方策が見つからない。その無為無策が続き、メルケル首相の支持率も下がり続けている。ハンガリーの国境フェンス構築を非難していた各国首脳も、部分的にせよ、国境閉鎖やフェンスの構築を模索することを余儀なくされている。

この間、関係国の政治家たちは解決策を打ち出すことより、他国の政策を批判したり、一定のポーズを作ったりして当面の体裁をとっている。

11月4日、ギリシアが30名の「難民」をルクセンブルグへ空路移送したニュースが配信された。タラップ下でチプラス首相が見送る光景がテレビで放映された。何十万人の「難民・移民」を通過させておきながら、この程度のことをテレビ放映することに何の意味があるのか。EUの難民クォータ実施の第一陣と銘打ったものだが、移送数の少なさが逆に難民クォータ実施の難しさを知らせてくれる。この程度のセレモニシカ見せられないEUの難民政策は、完全に崩壊している。

オーストリア首相などは、「ハンガリーからオーストリアへ入



ブルガリアとトルコの国境に張り巡らされたフェンス(80km, 2015年初頭に完成)

国した難民は、顔が明るくなる」と公言し、ハンガリー政府への敵意をむき出しにしている。しかし、先のウィーン市選挙で与党の社会民主党が支持率を落とし、その分、難民問題に厳しい対応を迫る政党の得票率が3割を超えた。上オーストリア州の選挙

でも同じ状況が生まれている。

権力に安住し、古い「西欧左翼」の常識だけで行動する政治家は、状況の深刻さを受け止めることができず、民意との乖離が広がっている。とくにドイツを含め、社会民主党の政治家の現実を直視しない建前論は民意を説得できず、支持を失っている。

ハンガリーが南部国境を閉鎖したことで、ハンガリーを經由する「難民・移民」はほぼゼロになった。クロアチアとスロヴェニアが、ハンガリーを全面的に肩代わりした形になっている。人口200万人の小国スロヴェニアが、連日数千人の「難民・移民」に対処しなければならない状況は非常に厳しい。

他方、ハンガリーの政治家はオルバン首相の政策判断を暗黙のうちに支持している。社会党の有力政治家ですら、「国境閉鎖が良いとは思わないが、それ以外に妙案が見つからない」と率直な意見を述べている。チェコやスロヴァキア、ポーランドの政府もハンガリー政府を支持し、国境警備隊を派遣することで連帯を表明している。スロヴァキア的首相は社会民主党系の政党に属しているが、クロアチアやオーストリアの社会民主党の与党政治家とは違い、国益優先の現実路線をとり、難民クォータに反対し、ハンガリー政府と手を組んでいる。

10月30日、ハンガリーのオルバン首相は、ニューヨークから世界を舞台に投資ファンを運用し、世界各国に慈善団体Open Society Foundationを設立しているユダヤ系ハンガリー人ジョージ・ソロスを名指しで、「ヨーロッパ社会を変容させるために、自らのネットワークを使って難民移動を鼓舞している」と批判した。こ

Orbán Accuses Soros of Stoking Refugee Wave to Weaken Europe
30th Oct.

"His name is perhaps the strongest example of those who support anything that weakens nation states, they support everything that changes the traditional European lifestyle". "These activists who support immigrants inadvertently become part of this international human-smuggling network."

Soros replies

"His plan treats the protection of national borders as the objective and the refugees as an obstacle." "Our plan treats the protection of refugees as the objective and national borders as the obstacle."

Six points proposal by Georgy Soros
26th Sept., 2015

1. The EU has to accept at least a million asylum-seekers annually for the foreseeable future.
2. The EU must lead the global effort to provide adequate funding to support the four million refugees currently living in those countries.
3. The EU must immediately start building a single EU Asylum and Migration Agency and eventually a single EU Border Guard.
4. Safe channels must be established for asylum-seekers
5. The operational and financial arrangements developed by the EU should be used to establish global standards for the treatment of asylum-seekers and migrants.
6. The EU needs to mobilize the private sector – NGOs, church groups, and businesses – to act as sponsors for absorbing asylum seekers and migrants.

エッセイ

れにたいして、ソロスはその批判事実を否定することなく、「私は難民救済を目的としており、その目的実現に国境は障害物だと考えている。オルバン首相は国境維持を主目的にし、難民を邪魔者に行っている」と反論した。

ソロスは豊富な資金を使って、旧中・東欧諸国や旧ソ連諸国の政界や社会に影響力を及ぼしている。他方で、彼を批判する個人や組織、慈善寄付を受け付けられない組織や政府にたいして、報復措置を行うこともある。ソロス財団が設立した中欧大学は当初ブラハに設立されたが、チェコ政府からの約束されたはずの援助が得られなかったために、ブダペストへ移設された。1997年、過大評価されていたチェコ通貨コルナを狙った売り浴びから通貨危機が生じ、チェコ政府はコルナを30%切り下げざるを得なかった。この売り浴びせを主導したのはソロスファンドだと考えて間違いない。

イギリスのTV局Sky Newsはギリシアの難民取材で、船上で難民に配布されたとするアラビア語の小冊子を入手した。同じ小冊子は、ハンガリー国境に残された難民のゴミからも見つかっている。この小冊子は、ヨーロッパに上陸した後、各国の入国管理や難民収容所でどのような受け答えをするか、注意を要する諸点、各国の支援団体の連絡先などが記されたものだ。ハンガリーのメディアは、ソロス財団にこの小冊子への関与を尋ねたが、無関係という回答があったようだ。

他方、インターネット上には、http://w2eu.infoと命名されたサイトに、難民・移民に関連する情報が網羅されており、35カ国の国ごとに難民・移民の法規制情報が掲載され、各国ごとに対応に注意すべき事項が事細かく記されている。たとえば、ハンガリーのHungaryのDublin IIをクリックすると、「ギリシアからハンガリーに入った場合、ギリシアへの送還の可能性がある」こと、「ハンガリーで指紋採取が行われた場合には、後々ハンガリーへ移送される可能性がある」こと、したがって「ハンガリーで指紋採取を受けた後に、別の国へ入国した場合、

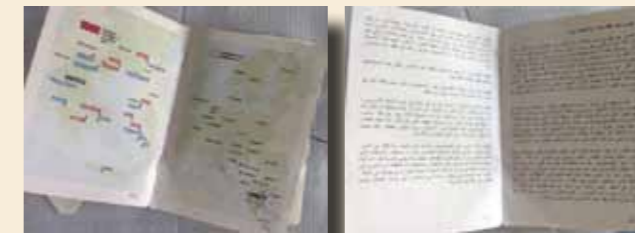
すぐに支援組織に連絡しなければならない」などの詳しい情報が記載されている。

このインターネットサイトが誰によって運営されているか分からないが、ソロス財団が深く関与していることは明白である。

9月下旬、オルバン首相提案に対抗する



Jonathan Samuels, Sky News Correspondent, Lesbos, Greece



形で、ソロスも6点に渡る提案を行った。その中で、「EUは年間100万人の難民を受け入れるべきであり、少なくとも最初の2年は難民1人当たり、15000ユーロの予算をつけて、社会に受け入れるべきである」と主張している。もちろん、ソロスの提案はこれに留まるものではないが、要点はここにある。

The EU should provide €15,000 (\$16,800) per asylum-seeker for each of the first two years to help cover housing, health care, and education costs – and to make accepting refugees more appealing to member states. It can raise these funds by issuing long-term bonds using its largely untapped AAA borrow-

エッセイ

ing capacity, which will have the added benefit of providing a justified fiscal stimulus to the European economy. (Read more at <https://www.project-syndicate.org/commentary/rebuilding-refugee-asylum-system-by-george-soros-2015-09#Qldl18XkCdrA8DTZ.99>)

しかし、なにゆえにソロスは欧州への大量な難民受入を支援するのだろうか。アメリカが中東政策の失敗の責任をとって、年間100万人を10年にわたって受け入れるべきというのなら話は分かるが、アメリカ政府に提案するのではなく、なにゆえに欧州への密航を支援しているのだろうか。

虚偽の「美談」で難民問題の本質を隠蔽するCNNと同様に、難民救済を旗印に、アメリカの中東政策失敗の責任を欧州に転嫁させようとする試みなのか。それとも、長期停滞の欧州を活性化させるために、異質な文化を持つ民族を大量流入させることによって、社会に流動性や機動性を与えようとする試みなのか。欧州社会の価値をひっくり返してリセットし、再び経済成長の土台を造ろうという提案なのか。確かに金融の小手先政策で好況感を作るだけのア

ベノミクスより、はるかにインパクトのある提言だが、欧州外の人間が欧州の価値転換を試みようとするれば、陰謀とみられることはあっても、理解され支持されることはないだろう。

欧州の将来を決めるのはアメリカではなく、欧州の人々である。欧州へ提言する前に、まずアメリカ政府に対して、中東政策の結末の責任を受け入れることを提言するのが順序だろう。

日本のメディアも含め、国際メディアは難民対応の現場から情緒的な記事を造るのが常だが、大量の「難民・移民」移動の背後にある大規模な密航組織や支援グループの実情を記事にすべきではないか。そうすれば、また別の現実が明らかになるはずである。

(2015年11月5日、
もりた・つねお)

留学生自己紹介

オペラが好きだ

リスト音楽院ピアノ科1年

新野見 卓也

オペラが好きだ。それこそ三度の飯より。日本にいたころは食費を削って、海外有名オペラハウスの来日公演に足を運んでいた。オペラが目的で海外旅行にも行った。チケット発売開始時には家族全員から携帯電話を借りて電話をかけまくり、ようやくつながると歓喜に打ち震え、何千、時には何万円も惜しみなく支払った。文献を漁り、スコアや対訳を読みながら音源を聴き、DVDを観て備えた。オペラは私にとって、そんな特別な体験だった。

それがいまや、オペラは私の日常である。通い詰めて、スタッフに顔を覚えられているほどだ。ハンガリー国立歌劇場には、オペラを日常的に通いやすい特徴がある。三つの「世界一」と言ってもよい。一つめは価格。ほとんど自動販売機で飲み物を買う程度の値段で学生席が買えるのは、世界中でおそらくここだけ。二つ目は待ち時間。他の伝統的なオペラ座のように、立ち見券を求めて何時間も極寒のなか並ぶ必要がない。開演5分前にボックスオフィスに行けば間に合う。そして三つ目は稼働率の高さ。ほぼ毎日オペラ、バレエ、コンサート、子供向けプログラムと様々な催しがある。

日本とのいちばんの違いは、音楽が日常生活のなかにある感覚だ。聴衆はあたりまえのように会場に集まり、あたりまえのように聴く。演奏者もまた、あたりまえのようにステージに上がり、あたりまえのように演奏する。もちろん、およそあらゆる芸術体験がそうであるように、音楽もまた一回性の体験であり、その意味では非日常的である。だが、その神秘性が失われることなく、生活のなかに音楽があるということ、これが伝統というものかと思った。

私が伝統と言うとき、もうひとつ意味を

持たせたい。それは記憶の継承ということだ。

記憶の継承の方法のひとつは、ものを残すということだ。例えば建築物としてのオペラ座は、ハプスブルク家盛衰の記憶を、リスト博物館の展示品は作曲家の生活の記憶を、今日まで伝えている。ブダペストには、こ



のようなものがいたる所にある。町中に、リストやバルトークはもちろん、マーラーやブラームスの記憶がある。

ものの記憶は、ものそのものが残る限り半永久的にある。だが、ものでは伝えられない記憶ももちろんある。それは、人から人へと直接伝えてゆくしかない。ものと違って、こちらは保持者が世を去れば、その記憶も消えてしまう。だから、常に伝え続けなければならない。いうまでもなく、演奏はこちらに属する。

例えばオペラでは、1858年の設立以来、マーラーやクレンペラー、フリッチャイラ、偉大な音楽家たちが指揮台に立ってきた。彼らの記憶は団員から団員へと、脈々と受け継がれている。コンチェルト・ブダペストでもハンガリー放送響でもない、まぎれもないオペラの音がピットから立ちのぼるとき、私はこの150年引き継がれてきた記憶に、思いをはせずにはいられない。

リスト音楽院に入学してまもなく、ウェンジェレーニ校舎内のとある展示を見たとき、同じような感動を覚えた。それはリスト音楽院の系譜図だ。そこには設立当初から今日にいたるまでの、数多くのリスト音楽院の

指導者たちが書かれている。右端には現役指導者の名が並び、もちろん現在私が師事しているグヤーシュ・イシュトヴァーン、レーティ・バラージュ両教授の名もある。そして、系図を左にたどっていくと、やがて一点に収束する。フランツ・リスト＝リスト・フェレンツその人である。リストが過去の偉大な作曲家であることは疑いない。リストは演奏＝記憶の継承のなかで生き続けている。

よく、人は二度死ぬ、と言われる。はじめは、その人が息を引き取るとき。二度めは、その人のことを覚えている人が、誰もいなくなってしまうとき。私はフォークナーの小説を思い出す。主人公の医大生は、自分の過ちから恋人を死なせてしまう。絶望した彼は、それでも、彼女の記憶を少しでも長くこの世にとどめて

おくために、苦しみの中で生きることを選んで小説は終わる。

Between grief and nothing

I will take grief. The Wild Palms
かなしみと無の間であって、僕はかなしみを選ぼう。『野生の棕櫚』

これほどの悲劇性はないけれども、記憶とともに生きるということは他のだれかを背負うことである。それに加え、音楽家という生き方を選択することは、相当の覚悟がいることだ。端的に言ってしまうと、音楽家なんて食える職業ではない。たくさんのお金を稼ぐ必要がある。一生勉強を続けなければならない。シューマンの母親は息子を法律家にしたいと望んでいたことなどを読むと、今も昔も変わらないなと思ってしまう。それでも、音楽の抗しがたい魅力にさらわれて、偉大な音楽家たちの記憶をとどめておくために、彼らを生き続けさせるために、いばらの道を選択した先人たちに最大の敬意を表したい。いまなお、ブダペストにリストの息吹があるのは、あの系譜に名を連ねた音楽家たちのおかげなのだ。

私たち日本人留学生に責務があるとす

留学生自己紹介

れば、それはその記憶を日本に持ち帰り、そこで伝えていくことだと思う。日本でそれをするには、ヨーロッパにおいてほど容易ではないだろう。200年、300年前の地球の反対側の記憶が生き続けるには、時間も距離も離れすぎている。けれど私は、それが人類史において最も尊く美しいものだと確信している。それは一生を賭すに足るなにかだ。私たちは、私たちなりのやり方を探さなければならないだろう。いま、リストやマーラーが生き続ける地であって、彼らのかげがえのない記憶のために、「僕は(喜んで)いばらの道を選ぼう」とそう言える人間でありたいと思う。

(にいのみ・たくや)

世界を感じられる都市ブダペストでの留学

ブダペスト工科経済大学経済学部

中川 美紀

現在私はブダペスト工科経済大学で交換留学生として勉強をしているのですが、毎日様々な国の留学生とともに幅広い分野の勉強ができていて素晴らしい環境に置かれていると思います。留学生は800人



程で、英語で行われる授業が留学生向けに用意されており、その中から自分の選考に関わらずどんな授業でもいくつでも取れることが魅力的です。日本では商学部で金融

を専攻していたのですが、ここでは専攻に関係のない授業を多く取っています。例えば、Hungarian and EU environmental Strategies, Digital Pedagogy (ICTを用いた教育学)、Cultural Studiesなどの授業を通し新たな知識や考え方を学び、私の興味関心の範囲は大きく広がりました。

私が留学を志すようになったきっかけは二つあります。

まず一つ目は、高校時代英語や世界史を学ぶ中、語学力を伸ばして将来世界をもっと幅広く知りたいと思うようになったことです。勉強をしていく中で、実際に日本の外に出て自分の目で色んなことを見て経験したいという思いが強くなり、大学在学中に留学をしたいと思うようになりました。

二つ目は、アルバイトとして外国人の入管手続きを主に行っている法律事務所で働いた経験が私に大きな影響を与えました。仕事を通じ、様々なバックグラウンドを持つ外国人が日本で働いていることを目の当たりにし、私自身も将来日本の外に出て何かを挑戦してみたいと思うようになり、留学することを本格的に考えるようになりました。

ブダペストを留学先に選んだ理由は大学に学びたい科目があったこと、ブダペストはヨーロッパの中心にあり様々な国の人々と出会えるだろうと考えたからです。実際、

ここに私の想像以上に多くの人々と出会うチャンスが溢れていました。ハンガリー人はもちろんのこと、ブダペストに集まるたくさんの留学生、ブダペストで働いている外

国人と沢山のひとと知り合いになりました。ブダペストは世界から様々な人が集まるとても活気のある国際都市であり、美しい街並みや美味しい食事もある最高の場所です。勉強以外のことに関して言えば、主に大学で仲良くなった友達とパーティーを計画したり、パブに飲みに行ったり、旅行に行ったりと楽しんでいます。ハンガリーからは簡単に近隣諸国に行くことができるので、友達と週末を利用してチェコ、スロバキア、オーストリアなどに旅行をしました。また、皆パーティーが大好きなので誰かの誕生日が来るたびに誕生日パーティーが開催されたり、バーやクラブにみんなで集まって飲んだり、日本とは違う遊びを楽しんでいます。時にはインターディナーと言ってそれぞれの国の料理を持ち寄って皆で晩御飯を食べることもあり、色んな国の食文化を一夜にして知ることができる機会もあります。

ブダペストに来て3ヶ月半が経ちましたが、毎日学ぶことがあり期待以上に得られたものがありました。勉強、旅行、パーティーとすべてが成長の場で、自分の国はどんな国なのか、自分はどんな考え方をしているのか、日々お互いがお互いのことを発信する環境の中で、より広い視野で相対的に自分の国と自分のことを考えることができるようになりました。また、友達の影響で今まで馴染みのなかった国に興味を持つようになり、私の頭の中の世界は大きく広がりました。フレンドリーで好奇心旺盛な留学生と語り合うことで沢山の刺激を受け、今後私は何をしたいのか、どのように生きていきたいのか、私の中で少しずつ固まり、自分で自分の人生を進める覚悟ができたように思います。

(なかがわ・みき)

留学生自己紹介

コミュニケーションの大切さ

リスト音楽院チェロ科

藤本 茜

私がなぜハンガリーに留学しようと思ったのか、それは、2013年に開催された「ぎふ・リスト音楽院マスタークラス」を受講したのがきっかけでした。

私は小さい頃からずっと音楽をやっていたわけではないので、「経験と知識が足りない、でも大学卒業後もまだ音楽を学びたい」と思っていました。海外ならば学費も安く、奨学金さえ取れば親に負担をかけずに済むだろうと思い、留学に関する情報を集めていた時のことです。偶然にも音楽関係のお仕事で知り合った方が、リスト音楽院に留学していたという話をしてくれました。早速その方に詳しい話を聞き、自分が留学がしたい旨を伝えたとこ、そのマスタークラスの最終日には留学試験があることを教えてくださいました。

ハンガリーの知識は何もありませんでしたが、話を聞く内に興味が湧き、少しでも可能性があるのならば、受講してみようと思ったのです。

初めてのオンツァイ先生のレッスンは、感動の連続でした。1回レッスンを受けただけでも、自身の音色の変化を体感し、その場で聴講していた方からも、「音色がどんどん変わっていくのがわかりました」と言われたのです。レッスンの最中に、弾き手と聞き手に違いを気付かせることはそう出来ることではないと思います。そこから私は、この先生に師事したいと強く思うようになり、毎回レッスンで録音した内容を聴いては練習に励みました。

1週間のマスタークラスでの成長を買ってくださって、試験は無事に合格。いざ留学となると、いろいろ不安が襲ってくるものなのかもしれませんが、私の場合、幼い頃から抱いていた海外への憧れと、新しいものへの好奇心、夢にまで見ていた音楽留学…期待で胸がいっぱいで、早くその日が来ないものかとすごく待ち遠しかったのを覚えています。

しかし留学後の生活は、私の思い描いていたものとは違い、辛いことの方が多いような気がします。

最初はすべてが目新しく、刺激的で、何もかもがキラキラしていたのですが、レッスンが始まってからというもの、切迫感と焦り、新しいコミュニティといったストレスから、体調をよく崩していた時期がありました。



日本とは違って、1つのものを確実に仕上げていくというよりは、たくさんの曲をおおまかに見てもらい、いつでも使えるようにするといったレッスン態勢で、譜読みが遅かった自分にとっては、スピードが追いつかず、ハードな日々でした。毎日夜遅くまで残って練習しても、次の日のレッスンでは緊張してうまく弾けず、怒られるのは日常茶飯事で、レッスン後にはよく泣いていました。

慣れないうちに週に4〜7個のレッスンをこなす事は、体力的にも精神的にも良くなかったと思います。

しかし現在では、パートタイム生として2年目に突入し、必死だった時の経験は生きてくるもので、1年前に比べれば練習のコツも徐々に掴め、夜には友達とご飯を食べに出かけられるようになりました。

辛いことが多いといっても、勿論得られるものは沢山あります。

リスト音楽院の先生方のレッスンは本当に素晴らしく、ソロでは、効率的な体の使い方、主に運指、運弓、何から何まで丁寧に教

えて下さいます。なんといっても音楽の作り方、表現することに関しては呼吸をするのに等しく、自然に提示できてしまうのには感嘆せざるを得ません。それと同時に、生徒一人ひとりへのコミュニケーションを大事にされており、毎回レッスンに行く度に、「ハンガリー語の調子はどうだい?」と聞いてくださいます。それに対してハンガリー語で返事をした時の先生の嬉しそうな顔が私は大好きです。

室内楽のレッスンも同様に、自分とは違う楽器の先生の、異なる視点からの意見がとても新鮮で、よく考えさせられます。先生のアドバイスを参考に、どう解釈するかは自分で答えを出さなくてははいけません。良い答えが出たときの先生の反応はとてもわかりやすく、少し大袈裟なくらい言葉にしてくれます。その反応が私のモチベーションを上げてくれるきっかけとなり、最近では練習をするのがとても楽しくなりました。

こちらでの生活は、日本人のコミュニティが狭い分、悩むことも多々ありますが、困った時に助け合えるというのが強みだと思います。ハンガリー人も日本が好きだという人が多く、とても真摯に接して下さいます。

学生なら演奏会がほぼ毎日タダで聴きに行けますし、小さい時に読んでいた絵本のくるみ割り人形がオペラで上演されているのを鑑賞した時には、本当に自分が絵本の中に入ってしまったかのような、不思議な感覚を味わいました。

語学の壁にも出くわします。日本では経験できないことがことが沢山あります。良いことも悪いことも自分を成長させる糧だと思えば、案外何でも乗り越えられるものだと改めて実感している日々です。

1年経って、やっと周りを見る余裕が出てきたので、オンツァイ先生にもよく「だんだん」と言われるように、一歩ずつ心身ともに精進していけたらと思います。

住み慣れた土地を離れて、全く違う価値観の人たちと出会い、素晴らしい実力者に囲まれて、お互いに刺激しあえる、そんな環境にいられることを本当に幸せに思います。

(ふじもと・あかね)

留学生

留学生自己紹介

ハンガリー語を学ぶ

大阪大学外国語学部ハンガリー語専攻

青木 暖

「ハンガリー語専攻でハンガリー語を勉強しています。」日本でもハンガリーでも、そういうと必ず「Miert? (なぜ?)」と聞かれます。そう聞きたくなるくらい、珍しい言語を勉強することになったのは偶然でした。

最初に自己紹介を。私は大阪大学外国語学部ハンガリー語専攻に所属していて、今はエトヴェシュ・ロラード大学でハンガリー語を勉強しています。私の最初のハンガリーとの出会いは、高校生の時でした。親の仕事の都合で3年間ハンガリーに住むことになったのです。高校の3年間をハンガリーで過ごしたといっても、インターナショナルスクールに通って英語で勉強をしていました。日常生活でも友達と会話するときでも、英語を使っていました。確かに、グローバル化の影響で今英語は世界共通語になっていると思います。ハンガリーでも英語を使って生活することはできました。まだまだ言葉が通じない場所や人もあったけど、基本的に親切であたたかいハンガリー人のおかげで英語だけで不自由することなく生活していけてい

ました。高校3年間は本当に楽しく充実したもので、ハンガリーは私の大好きな場所になりました。

けど本当にこれでいいのだろうか?という思いが心の中にありました。日本に帰国して、友達にハンガリーのことをいろいろ聞かれました。どんな国だったのか、どんな言語を話すのか…。その時、ガイドブックに載っているような表面的なことしか答えられなかった自分にショックを受けました。自分の住んでいた、大好きだと思っていた場所のことや言語を何も知らなかったことに後悔し

ました。そんな時に大阪大学外国語学部にハンガリー語専攻があることを知りました。そこで、ハンガリーについて学ぶことを決めたのです。

2回目のハンガリー滞在である今回の留学では、ハンガリーは高校生のころと全く違って見えました。昔は、ぼーっと眺めていただけの風景もキラキラ輝いていて、1つ1つがとても魅力的でした。大好きなハンガリーがもっと好きになりました。ハンガリー語で話すと、ハンガリーの人たちはとても驚いて、でも私のつたないハンガリー語を理



解しようとしてくれました。英語でもコミュニケーションは取れるでしょう。けど現地の言葉を使ってコミュニケーションをとることが、こんなにも距離を縮めてくれるなんて思ってもいませんでした。でも、授業も日常生活もハンガリー語を使って生活すること

は思っていた以上に難しいことでした。同じクラスにいるポーランド人の生徒たちはみんなハンガリー語が上手く、最初のころは先生の質問の意味が分かったころには、もうポーランド人の生徒たちが答えてしまったあとだったりして悔しい思いをしました。友達とハンガリー語を話していても、うまく伝えられなかったり聞き取れなかったりもして、何度も落ち込みました。けど、あきらめずに毎日ハンガリー語に触れるようにしていると少しずつ聞き取れる言葉が増えていき、「1か月前よりうまくなったね。」と友

達に言われた時はとてもうれしかったです。

また、留学先の大学での授業は毎日あるわけではなく自由な時間がたくさんありました。最初のころは、せっかく留学に来ているのにこれでいいのだろうかと不安でした。でもこれをチャンスだと考えることにしました。せっかくの自由時間をやりたいことを全部するための時間にしようと思ったのです。私は合唱が大好きでハンガリーが合唱大国と聞いて合唱団に参加したいと考えていました。なので、現地の人たちの合唱団に入れてもらって毎週一緒に練習に通うことにしました。ハンガリー刺繍もやってみたかったので、ハンガリーのおばあちゃんたちに刺繍を習うことにしました。合唱も刺繍もハンガリー語だけを使ってコミュニケーションをとっています。最初はうまくいかないこともたくさんありました。今でも100%すべ

てわかっているとは言い切れません。けど、合唱団で出会った友達とは、飲みに行ったり出かけたりと合唱以外でも仲良くしています。現地の言葉でコミュニケーションを取っているからこそ得られている経験だと思っています。

ハンガリーでの留学はあっという間でした。留学を支えてくれた人たち、ハンガリーで出会えた人たちに感謝の気持ちでいっぱいです。留学生活も残りわずか。くいのないように全力で楽しんで、しっかり学びたいと思います。

(あおき・のどか)

留学生

日本語を勉強して 分かったこと

Hegedüs Ákos

ブダペスト工科大学電気工学部で勉強しています。日本語を勉強して、今月でちょうど3年になりました。3年前、私がなぜ日本語を選んだのかというと、以前から英語の他にも外国語が勉強したかったのですが、大学も忙しかったし、どんな言語を勉強したらいいかもよく分かりませんでした。結局、長い間か考えた上で、ロシア語と中国語と日本語の中から選ぶと決めました。ロシアと中国の文化はあまり知らないのに対して、空手や合気道もやったことがあるし、アニメもよく見るし、日本人と会ったときに本当にいい印象を受けたから、その中から結局日本語を選んだのは当然かもしれせん。

高校生の時は、先生達からいつも「言語能力が低い」とか、「才能が全くない」と言われていました。だから、最初は日本語でも自信がなかったし、勉強に対する熱意もあまりありませんでした。当時の私が、「外国語を勉強することによって何が得られるか」と質問されたら、単に「仕事で役に立つかもしれないし、履歴書にも書ける」と答えただろうと思います。たまたまラッキーだっただけかも知れませんが、実際に私がこの3年で体験したことは、当時期待したことよりずっと大きいことでした。

まず、最初の1年間で、外国語の勉強の楽しさがよく分かるようになりました。日本人の先生に今まで全然知らなかった文化を教えてもらい、どんどん世界が広がっていくのはすごく面白かったです。また、単純なことですが、言語は才能を問わず、勉強すればするほど上手になるということを見ました。

みなさんは、世界で最近話題になった「80対20の法則」をご存知ですか。簡単に言えば、20パーセントの動力は80パーセントの結果になるという意味です。たとえば言語について言えば、一番頻繁に使われる20パーセントの言葉を知っていると、文章の80パーセントは理解できます。でも、コミュニケーションする時には、逆に完全に動力しても、速く上達することはできません。ですから、言語学習は長期の投資として見なければなりません。

ちょうど1年前、「エアコン」という日本語とハンガリー語の交換授業で、ハンガリーに留学中の日本人や、日本に興味があるハンガリー人たちと、ほとんど毎週会うことになりました。授業では、は



じめに前の週に決めたトピックについてハンガリー語と日本語で書いた文章を皆が1人ずつ読みます。参加者の言語能力は様々なので、まだ自分で文章を作れない人には皆が手伝って、言いたいことを翻訳します。次に、前の週に覚えた言葉や何かわからない単語について自由に尋ねて、母語話者の人達からアドバイスをもらいます。最後に、ハンガリー語も日本語も使わなければならない面白いゲームをやります。

エアコンの授業に通って1年間の経験で感じたのは、普通の授業ではあまり勉強できないことをたくさん勉強したということです。国際交流基金と一緒に勉強している同級生達と比べたら、私はまだ経験が足りなくて、時々授業のペースに追いつけなかったのですが、普通の生活やコミュニケーションの時に本当に役に立つ言葉を知っているから、いつも授業で取り扱われるトピックからちょっと離れたら、皆よりも自信があります。

ハンガリーに来た留学生達に色々な所を見せたかったし、短くても楽しい1年間を過ごしてほしいから、週末など時間があるときは色々な遠足に行きました。

皆にとってどんな経験だったか分かりませんが、私にとっては一生忘れない思い出です。

その他にびっくりしたのは、この1年における、ハンガリーに対する自分の考え方の変化です。元々ハンガリーはいい国だと思っていましたが、もう長い間ここに住んでいるから色々なことに慣れすぎていて、あまりハンガリーの習慣を守らなくなっていました。でも、ここに来る留学生達は、私にとってはなんでもないような細かいことにも驚くので、私も自分の国を外国人の観点から再発見しました。

日本語を勉強しているおかげで日本に行くこともできましたから、日本語を選んで本当によかったと思っています。自分に対して言いたい一つの文句は、どうしてもっと早く勉強を始めなかったのか、と言うことです。たぶん誰にとっても、自分の文化と違うことを経験するのは面白いことだと思いますから、早く始めないと私と同じように後悔することになるかも知れません。

ハンガリーはヨーロッパの中央にあって、たくさんの国に囲まれています。しかし、ハンガリーに似た文化や言葉を持つ国は周囲に全くないから、ハンガリーは島国のようなのだと言っても過言ではありません。だからこそ、日本とハンガリー、この二つの国の人がお互いの言語を勉強するのはとても大切だと思います。

(ヘゲドゥシュ・アーコシュ)

終わりのない日本語、 日本文化への愛

Hornos Dániel

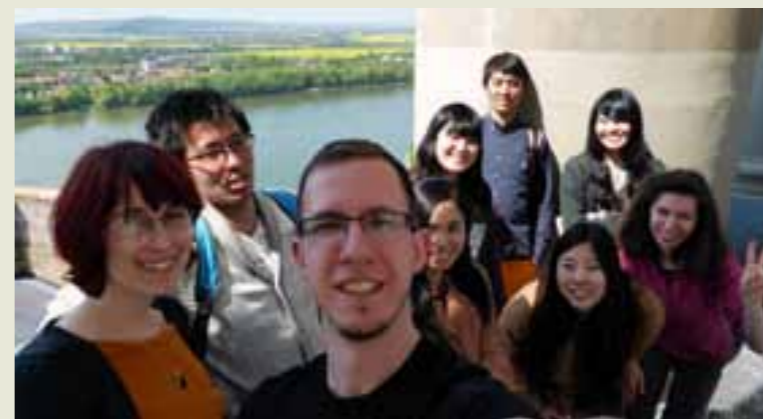
カーロリ・ゲーシュパール大学で、日本語日本文化学科修士課程1年に在学しています。日本語を勉強し始めて8年ほどになりますが、初対面の人に日本語・日本文化を専攻していると言うと、よく、「なぜ日本語?」「難しすぎないですか?」などと質問されます。日本語の先生から、「どうして日本語に興味を持つようになったかと尋ねると、ほとんど学生はアニメがきっかけと答えます。ダーニエルさんはそうではなかったんですね?」と言われました。「先生、ごめんなさい!実は僕もアニメだったんですけど…」。

初めて日本文化と触れ合ったのは13年程前、テレビで「デジモン・アドベンチャー」というアニメシリーズを発見したときでした。まだ10歳ぐらいだった僕は、そのアニメが日本のものだと全く知りませんでした。ポケモンと似て、いわゆる「選ばれし子供たち」がモンスターと一緒に戦っていくという物語です。子供のとき観たヨーロッパやアメリカのアニメと違い、デジモンの物語はより複雑で、登場人物の感情もヨーロッパのアニメと違いました。東京タワーをはじめ、東京を代表する建物や風景が数多く描かれており、大人になって初めてこれらの風景を生で見るときは感無量の思いでした。デジモンを手始めに、様々なアニメを観ましたが、そのほとんどを日本語音声で観たので日本語にも興味が沸きました。インターネットで日本について検索し、アニメ以外にも、日本史や他の日本文化にも深く興味を持つようになりました。

2007年に、僕の住んでいる町で日本語を教えている先生を見つけました。それまで勉強したドイツ語や英語と比べ、日本語は全く違い、なにかエキゾチックな言語でした。特に漢字に魅了されました。熱心に勉強し、翌年には日本語能力試験3級に合格しました。

高校を卒業したとき、日本語日本文化を専攻する決意をしてカーロリ大学に入学しました。そこで日本に関する知識をさらに広げることができました。教師と学生の関心は僕と同じく「日本」にありました。高校とは雰囲気の違い、まるで別世界のようなものでした。入学した年に、改定された能力試験のN3レベルに合格し、その後すぐに大学の仲間たちとN2への準備も始めました。

日本を旅行する夢が実現したのは2013年の秋でした。2013年、文部科学省の「日本語・日本文化研修留学プログラム」の試験に合格して日本に、留学できることになりました。留学先は大阪大



学でした。出発前は非常に心配しました。「日本での生活に慣れるかな?日本料理は大丈夫かな?友達を作れるかな?人生初の1人暮らし、人生初の飛行機、人生初のアジア・日本ではどうなるのかな?」。しかし、日本での生活にあつという間に慣れてしまい、何の問題もありませんでした。日本料理が大好きになり、たこ焼きは恋しいです。阪大にハンガリー語学科があり、友達を多く作ることができました。

もちろん、留学という貴重な機会を得たことで、日本についての知識や日本への理解も深めることができました。本語で授業を受け、日本語能力も上達し、2014年夏、ついにN1試験に合格できる程までになりました。日本にいた1年間、日本語以外に研究することができました。先生の指導下で、鎌倉時代の武家法について研究し、ハンガリーに戻ってから日本での研究にもとづく論文をコンクールに提出しました。

休みの間はたくさん旅行しました。奨学金を貯金して、5日間JRの普通列車に乗り放題の青春18切符を存分に活用し、1年間で長崎から鹿児

島まで九州を回り、四国の4県を訪ね、東京・関東まで行き、夏には韓国と沖縄にも行くことができました。いつも一番安い宿を必死に探しました。そのおかげで、いろいろな経験を重ねられました。ネットカフェやカプセルホテルに泊まりました。東京に行ったとき、カウチサーフィンというサービスを使い、東京に住んでいる日本人の若者の所に泊まらせてもらいました。また、東京や沖縄に行ったときは、日本に住んでいるハンガリー人の所にも泊まらせてもらいました。本当に充実した1年でした。

ハンガリーに戻り、3年生になりました。授業のない時間を使って、日本語通訳・翻訳ができる研修の機会や、日本語が練習できるサークルを探しました。ある日系企業で通訳のアルバイトの募集があり、すぐに応募しました。今もその企業で通訳をしています。専門用語が多すぎて半年経っても分からない単語が出ますが、非常に面白い仕事です。「エアコン」というあだ名が付いているサークルのおかげで、新しい人たちに出会い、大切な友達を作ることができました。ハンガリー人学生と当地に留学している日本人とで、遠足やイベントで楽しく過ごしました。夏に日本人の留学生が帰ったとき、みんな淋しくて悲しくてたまりませんでした。9月から新しく来た留学生も多く参加しています。

デジモンを初めて観てからすでに13年程経ちました。しかし、僕の日本文化や日本語への愛はより強くなったと感じています。これからも、日本への理解を深めるために、そして日本語の上達のために、できるかぎり努力したいと思います。

(ホルノシュ・ダーニエル)

漢字勉強の魅力と面白さ

Stéger Ákos

およそ10年前のこと、私はある言葉の響きに魅了されてしまった。その言葉は日本語だった。なぜなら、小さな表現まで人間関係がありありと表れるところや、心配りを忍ばせる微妙なニュアンスの多さに感動を覚えたからだ。

日本語学習者の誰もが実感すると思うのだが、いくつもの層からできている日本語は、どんどん新しい発見を提供してくれる。「日本語が分かった!」と歓声を上げた瞬間に新しい秘密の壺が開いてしまい、やはり何も分かっていないと実感させる。その中でも漢字よりふざわしい例はなからう。

漢字を初歩レベルでかじってみるだけでは、面倒に感じられて挫折することが多い。が、少し没頭して学べば、より深く、より複雑な知識に辿り着くことができる。漢字には、複数の読み方、字形の変化を語る字源、中国語の文法を反映した熟語など、複雑で興味深い面が多く、日本語の中に存在するもう一つの言語と言っても過言ではないだろう。また、漢字は非常に便利だ。小説などの文章をスラスラ読ませてくれる手段であり(なぜなら一字一字読む必要がなく、前後を一見しただけですぐ文脈が捉えられるから)スペースの節約にも役立つ。

ハンガリーに在住の皆さんがご存じのように、ハンガリー語の注意書きを見れば「Kérem, ügyeljenek a fel- és leszállásnál」などと書いてあるところが、日本語で表記すると「足元注意」というように、何とも単純で分かりやすくなる。

「漢字は必要以上に難しいから廃止しよう」というような議論は歴史上よくあったようだが、本当にそうだろうか。漢字はややこしいと言えはややこしいし、数が多いことについては議論の余地がない事実だ。しかし「多い」と「難しい」は大分意味が違うし、多いからといって難しいわけではない。

なので、日本語を教えて4年目になる私は、漢字教育に特に重点を置いている。生徒に漢字を教える時に大事になってくるのはまず、漢字の難しさを強調しないことだ。その理由は明らかだろうが、最初から唐宋音・呉音・漢音や繁体字、康熙字典の214部首について説明し学習者の頭を混乱させたら、そこでおしまいである。生徒は衝撃を受けて逃げ出し、次回から不登校になってしまうのではないだろうか。

西洋人にとって親近感のないこの文字は、勉強し始める時は意味もない線や点、四角などを無理に重ね上げた一まとまりにしか見えないだろうが、実はそうではない。私がハンガリー人生徒に必ず伝えたいのは、個々の漢字には語らいがあり、短編小説並みの粗筋を描いたものだということだ。部首というのはその主人公であって、その組み立て法によって話の内容が変わる。この内容にどういう意味を持たせるかは学習者へのお任せだ。

個人の想像から漢字の字形を説明する方法は昔から行われてきた。例えば、白川静先生や、Remembering the kanjiを記したジェームズ・ハイジック氏の例である。これらはしばしば懐疑的に見られてきた。つまり、「アカデミックではない」、「実際の字源とは関係がない」などの声があった。しかし私が思うに、個人的な漢字の解釈のし方は駆逐するのではなく促進すべきだ。そうすることによって文化圏問わず、不思議なこの文字に親しみ馴染むことができるようになるのではないか。

生徒が考案した創作漢字

「最低賃金」を1語で表記。「金」の下部を「小」に交えたもの。



自分の生徒たちにはできるだけ想像力を自由に使って漢字の中身を捉えるように促している。例えば私の授業では「鬱」などの漢字がよくネタになる。部首の意味を説明した上で生徒に、なぜこの字が「うつ」を意味すると思うかと質問する。すると、次々と立派なアイデアが出てくるのだ。例えば、缶の部分は「オズの魔法使い」という映画の登場人物であるブリキ男。彼は森に迷っており(二本の木にはさまれていることから)、しかも地図も破れている(ヒの上の部分「囧」に似ていることから)、それによる途轍もない寂しさが「鬱」だ、という声が上がるとこへ、いやいや、缶はブルドーザーで、森が破戒されるのを眺めている動物達(彡)の餌(ヒ)がなくなるのが「鬱」だよ、と別の反応が相次ぐ。こういった反応は日本語教師として、涙が出るほどの幸せを与えてくれる。

私の教え子には、しん繞「辵」を「踏み潰されたトカゲ」、「立」を「帽子を被った人」というようにあだ名を付ける者がいる。「喜」の字について、十の豆を口に入れることから、食糧が豊富にあり暮らしが充実しているのを喜ぶ、と捉えた生徒もいる。それらは決して勉強不足の証(あかし)ではない。真逆だ。漢字の作り上げた脚本を読めるようになってきているし証なのだ。もともと漢字は、発生したときには学問的に捉えられたものではなく、ただ人間が自分の見た世界、周囲にある現象を解釈するのに使った手段であった。そこから溢れ出る人間味こそが私には漢字の魅力に思われる。

生徒には常に言うが、日本人でも中国人でも生まれた頃から漢

字が分かるわけではない。彼らもたくさん苦勞をして、何年もかけて学習してきたわけだ。文化的背景や教育制度はもちろん随分違うが、漢字圏の国に住んでいても、学習の苦勞は西洋人のそれとそう変わらないだろう。日本の小学校では「親」の漢字を教わる時に、木の上に立って子供を見守るのは親だよ、という教え方がよく使われているそうだ。これは文化圏や母語を超えた、興味深い現象だと思う。

授業で生徒に新しい漢字を作らせることがある。「今からハンガリー語で言う概念を、勉強してきた部首を使って、漢字に直してください」という課題を出すのである。日本でここ数年、毎年行われている創作漢字コンテスト(産経Square)を思い浮かべて頂けれ

ばいいと思う。「ソーシャルメディア」、「最低賃金」、「異文化体験」などの概念を挙げると、素晴らしいアイデアが溢れ出てくる。私はそれを見ていると、漢字を作った古代人と私たち西洋人のやり方がどれほど共通しているかを感じ、鳥肌が立つ。それこそ漢字の魅力でなければ何だろうか。

漢字は古代人の知識を語りながら現代でも実用的に使うことができる、非常にありがたいものだ。こんな豊かな文字を持つ漢字圏の人たちを羨ましく思うことさえある。読者の皆様は、漢字のことをどう思っているだろうか。

(シュティーゲル・アーコシュ)

平成28年度 新入生(編入生) 学校説明会の実施について

- 日時
平成28年 1月23日(土) 10:00~11:20(受付9:30~)
- 会場
ブダベスト日本人学校 2階ホール及び小学部1年教室・中学部1年教室
住所 1125 Budapest Virányos út 48
電話 +36 1 392 0360
- 対象
小・中学部新1年生保護者(新規編入生保護者も参加可)
(児童生徒の同伴可)
- 式次第
 - 校長あいさつ
 - 学校の概要説明
 - 事務連絡
 - 小学部・中学部別、学校生活及び学習についての説明
※会終了後、ご希望に応じて、校舎内をご案内いたします。
- その他
 - 説明会参加ご希望の方は、予めご連絡ください。
 - 乳幼児を連れての参加も可とします。
 - 上履き、筆記用具をご持参ください。
 - 今回の学校説明会にご参加できない方で、平成28年度4月からの新入学・編入学を希望される方は、本校ホームページより「事前調査表」をダウンロードの上、記入して3月4日までに本校までご提出ください。メール添付でも直接お持ちいただいても結構です。事前調査表で「B」を選択されてご提出いただいた方に、3月中旬に入学式のご案内をメールにてお送りいたします。
- 新入学・編入学に関する問い合わせ等がありましたら、通年 月曜日~金曜日
午前8時~午後5時にご連絡頂ければ、対応させていただきます。

問い合わせ先：ブダベスト日本人学校
担当 吉田

メールアドレス：yoshida@bjpschool.hu

日本人学校

ブダペスト日本人学校の中学部では、開校以来ほとんどの年で総合的な学習の時間に太鼓に取り組み、ドナウ祭のステージで発表してきた。ハンガリーという地で、日本の伝統文化の1つである太鼓に触れ、それを通して日本について知り、日本について発信する1つの方法として学んでいる。

今年度の中学部は16名でスタートした。残念ながら中学部3年生がいなかったが、昨年度も太鼓を経験した中学部2年生が9名もおり、小学部6年生から中学部に進学してくれた子ども4名いたので、太鼓の活動がどのようなかを知っている生徒の割合が非常に多く、心強かった。

今年のドナウ祭の計画を進める上で、「16人全員でステージに立つ」ということを自分の中の1つの大きなテーマに決めた。「この16人だからこそできる活動」、「この16人だからこそできる演奏」になるためにはどうしたらよいかを考えた。毎年、中学部では大きくとらえて2曲を選び、練習してきた。「1曲は去年やった2曲の中から1曲を選び、継承する」、「もう1曲は過去の先輩たちが演奏した曲の中から選び、継承する」という方法をとってきた。どちらも「自分たちの経験」や「ビデオなどの先輩たちの演奏する姿」という参考になるものがある活動だった。しかし、今年はこの心強いメンバーならば、もっと自分たちで作り上げる活動ができると考えた。自分たちで作り上げる活動をすることで、より中学部という集団を高められるのではないかと考えた。これが今年の中学部の太鼓を実施するにあたっての1つの目標だった。

そこで、夏休みを使ってこの16人だからこそ演奏できる曲を作曲することにした。今までにそんなことをしたことはない私にとって、非常に難しい課題ではあった。しかし、中学部の生徒たちが自分たちで作り上げていく姿を想像しながら作曲することは非常に楽しかった。タイトルも強弱も何も無い、ただリズムだけが記されている楽譜が完成した。ここからは練

この16人だからこそその活動を

習をしながら、16人の知恵を楽譜の中に取り入れていき、本当の完成を目指そうと考えた。

ふれあい大運動会のまとめ活動も終わった9月の下旬から太鼓の活動が始まった。始めるにあたって、昨年度から口を酸っぱくして言っている「太鼓はあくまでも『手段』であって、『目的』ではない」ということを再確認した。「太鼓の練習は、技術を高めて演奏者としての力量を求めて活動しているのではない。太鼓への取り組みという『手段』を通じて、中学部としてどんな姿になりたいのか」という「目的」をしっかりとって取り組むことを確認して活動を始めた。太鼓の練習をするだけでなく、何度も話し合いの時間をもって自分たちが進むべき道を決めていった。

今年の中学部の活動の「目的」は、「活動を通して中学部の団結力を高める」と決まった。そのためには何を意識して取り組むのかも話し合い、「見通しをもつなど、計画性をもつこと」「周りとの協力したり、合わせたりする協調性をもつこと」と決まった。

太鼓をたたく時間だけではなく、準備から片付けまで16人全員が主体的に取り組む姿を理想として、練習の日程は教員が提示をするが、内容についてはリーダーが中心となって決めるという方法をとった。初めのうちは、昨年度経験している9人が中心となって準備や片付けの仕方を教えたり、太鼓の扱い方を教えたりしながら進めていき、徐々にそれぞれが自分で何をすべきかを感じて動ける集団へと変わっていった。決して順風満帆ではなかったかもしれないが、うまくいかないことを自分たちで乗り越えて少しずつまとまっていくことができた。本番が近づくにつれて、集団としての高まりが見えても感じられる、そんな気持ち良さがあった。

昨年度も演奏した「一番太鼓」がある程度曲として仕上がった後に、新曲「NEW(仮)」の練習が本格的に始まった。作曲者の思いとして、すべてのパートにスポットが当たるようにという思いから、凝った構成の曲になってし

吉田 健一

まい、リズムを取るところから苦労する子がいた。それでも、パート練習や自主練習でそれを克服し、2週間かけてリズムをたたけるようになった。そこで、各パートで強弱や声、アレンジなどを考えて、曲に組み入れた。実際に入れて曲を流してみると、それぞれのパートの演奏にメリハリがつく半面、曲全体としてのまとまりがなかった。そこで、全体の統一感を出すために話し合いをし、内容を詰めていった。声の出し方を揃え、腕の上げ方にも決まりを作ることで、ようやく新曲「花鳥風月」が完成した。今年のこのメンバーだからこそできた1曲となった。

今年はドナウ祭と合わせて、2週間後に行われた「第29回国際交流祭inブダペスト」にもご招待をいただいて演奏する機会を得ることができた。ドナウ祭までを1つの目標に取り組み、国際交流祭では、さらに一段レベルアップした姿を見せようと声をかけて取り組み続けた。最後まで、中学部2年生の10人が中心となり、高め合っていく16人の姿があった。自分たちで決めた「活動を通して中学部の団結力を高める」という「目的」は十分に達成できたと思う。

このメンバーでの最後の演奏は国際交流祭でのステージであった。ヴィガドーという歴史ある立派なステージに立つ機会を得て、16人の素晴らしい姿をたくさんの方に見せることができた。演奏はもとより、ここまでの団結した姿があったからこそ、演奏が終わった後の大きな拍手、拳を突き上げる観客の姿があったのだと思う。

やらされてやる活動ではなく、生徒自身が主体的に取り組む活動をすることで、16人全員が1段も2段も成長することができたのではないと思う。同時にこの16人だからこそ、ここまでの活動ができたのだと思う。この16人と共に1つの作品を創り上げることができたことが本当にうれしい。

(よしだ・けんいち 日本人学校教諭)



緑の丘補習校



補習校バザーを終えて

今村 素美子

先日の11月28日土曜日、みどりの丘日本語補習校にて、保護者主催のバザーが開催されました。このバザーは毎年11月に行われ、そこでの収益金は補習校の運営費として使われることになっています。

今年もバザー係を中心に保護者が一丸となり、アイデアを出し合いながら、当日の成功に向けて力を合わせて取り組みました。補習校のバザーは、1ヶ月程前から提供品の回収や仕分け、値札付けといった準備から始まります。そして当日は、朝から会場の設定や商品の陳列、接客、後片付けまでと大変な作業となりますが、今年も保護者どうし協力し合い素晴らしいチームワークにより、大成功で幕を閉じることができました。

バザー当日はあいにくの雪模様で客足も心配されましたが、多くのハンガリーの方々や日本の方々も補習校に足を運んでくれました。

この補習校のバザーは、主に6つのブースに分かれて構成されています。書籍、衣類、雑貨、食品、クラフト、子供達の出店です。

中でも子供達の出店は、小学1年生から中学3年生まで幅広く、並べられている内容も自分が使っていたオモチャや衣類だったり手作りのアクセサリーやお菓子だったり様々で、とても興味深いものばかりでした。自分達のお店で何を売るかというテーマから始まり、商品の陳列や接客の仕方に工夫を凝らし、友達どうしで知恵を出し合いながら、年に一度のバザーを楽しんでいました。

実際に出店したことのある私の息子も、商品を売ることの難しさや売れた時の喜び、そして様々なお客さんとの接客の楽しさなどを知ることができ、とてもいい経験となりました。この子供達の出店は補習校バザーならではの特徴であり、私はとても面白く素晴らしい企画だと思っています。

私自身は2年続けて食品ブースを担当しました。どら焼きやカステラやあんパン、クリスマスのデコレーションが施されたマフィンやケーキなどの保護者達の手作りお菓子や、お寿司、緑茶や麦茶などの飲み物、そして今年は新たにパンダ型のおにぎりを販売しました。なかなかこのハンガリーでは手に入らない日本のお菓子は特に、子供から大人まで大変喜ばれました。パンダ型のおにぎりはとても可愛らしく、そして懐かしく、日本にいた時の子供のお弁当を思い出しながら作りました。興味津々な顔つきで購入してくれるハンガリーの方々や、久しぶりに日本のお菓子を食べれると喜んでくれる日本の方々で、食品ブースも賑わいました。

新たな試みとしてはクラフトのブースでも、保護者手作りの和柄の巾着やバッグ、さらには掛け軸を販売し、こちらもやはり大好評でした。日々育児や仕事で忙しいはずの保護者達も、このバザーのために出来ることを自ら考え積極的に作成してくる様子から、保護者達の溢れるパワーを感じました。

他のブースもバザー中たくさんのお客さんに囲まれ、保護者達はハンガリー語や日本語で一生懸命に対応していました。実際に接客して

いた中で、日本に興味を持ってきているハンガリーの方が年齢を問わずたくさんいること、そして日本の文化や言語を深く理解し習得されていることに、私自身とても驚かされました。

最後にバザー係を担当した保護者からは、次のような感想を聞くことができました。「補習校保護者のボランティア精神と毎年経験することによって積み上げられてきた全体のチームワークの素晴らしさにとても感動しました。実際に来て頂いたハンガリー人のお客さんからは、毎年楽しみにしているのよ!、いいものが買えたわ!と喜んでもらえたり、中にはこのバザーの為にブダペスト市外からわざわざ来てくれた方もいて嬉しかったです。補習校の子ども達もみんながバザーを楽しめたこと、その子ども達が自らお店の売上げの一部を補習校に寄付として持って来てくれたこと、そして最初から最後まで全てに於いてとてもいい雰囲気バザーを終えられたことが嬉しかったです。」

現在みどりの丘日本語補習校には、日本やハンガリー以外にも様々な国籍の保護者達がいいます。国籍は違っても、自分の子供が日本語を学習できるこの補習校を守り盛り上げていきたいという想いはひとつです。その保護者達の強い想いが形となり、今年のバザーの成功に繋がったのだと私は感じました。そして補習校はただ国語の学習をするだけの場ではなく、子供達や保護者全員が力を合わせて取り組むこの行事を、これから先も長く存続してくれることを願っています。

(いまむら・すみこ)



編集部よりのお知らせ

「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。<http://www.danube4seasons.com>

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書でお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。



ハンガリー文化の日 ドナウ宮殿・Propart Hungary 共同企画

日本・ハンガリーガラコンサート

3人の日本人演奏家ハンガリーデビューコンサート

2016年1月22日(金) 19時開演

ドナウ宮殿 / Duna Palota 1051 Budapest V., Zrínyi u. 5.



プログラム:

- J. ショトラウス2世: 喜歌劇「こうもり」序曲
- I. カールマーン: 喜歌劇「チャールダーシュの女王」より **今井 文音 (ソプラノ歌手)**
シルヴィアの歌「ジーベンピュルゲンの娘」
- F. レハール: 喜歌劇「メリー・ウイドウ」より ヴィリアの歌
- F. リスト: ピアノ協奏曲第1番 変ホ長調 **菅原 望 (ピアノ)**
- A. ドヴォルザーク: 交響曲第9番 ホ短調 作品95「新世界より」
ドナウ交響楽団 (共演)
金井 俊文 (指揮)



チケット料金 (各指定席):
一般 2 500 Ft 退職者・学生 1500 Ft



チケット取り扱い・お問い合わせ:
 ドナウ宮殿 (Duna Palota) Tel.: +36-1-235-55-00 www.dunapalota.hu
 ドナウ交響楽団 www.dunaszimfonikusok.hu
 ONLINEチケット販売 <http://www.jegy.hu/program/japan-magyar-galakoncert-a-magyar-kultura-napjan-65177>
 Propart Hungary Bt. Tel.: +36-70-3815548 proparthungary@gmail.com (日本語可) www.propart.client.jp



補習校バザー



日本人学校太鼓演奏



コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

池田信夫「21世紀最初の10年ベスト経済書」第2位にランク
「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン

コルナイ・ヤーノシュ自伝

—思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】

◆好評発売中！ ◆定価 4935 円（税込） ◆A 5 判 / ISBN 4-535-55473-0 日本評論社



体制転換 の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学
部の定番テキスト。体制転換の理論と転
換直後の現状を分析。各大学で教科書と
して使用。

盛田常夫著

第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の
比較分析に新たな視点を提供。

第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体
制転換の違いを解明。

■ 新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ【著】 盛田常夫【編訳】

■ 定価 3045 円（税込） A 5 判

■ ISBN 4-535-78331-4

異星人伝説

「週刊文春」(米原万里)、「週刊ダイヤモンド」(北村伸行一橋大学教授)で書評。
ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を
輩出した。大きな足跡を残した科学者たちの評伝。

体制転換20年の歴史的・理論的総括の書

ポスト社会主義の政治経済学

体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。

日本経済新聞(2010年3月21日)ほか、多数の書評。

旧来の定説を覆し、新たな知見を広める革新の書。

盛田 常夫著 日本評論社 定価3800円

